SF

1969·10 no.6

反省的読書会考

[redacted]

土星シリーズ ①
「土星のプリンセス」(連載第2回)

明治大学SF研究会

去る10月5日の会合で、SF研の方向の一つとして、SFのあるテーマについての共同研究をやろうではないかということに全員の意見が一致しました。（残念ながら出席数の関係で正式決定には至りませんでしたが）

SF研の前期の活動を振り返ってみると、確かに満足できるものであったとは思われません。原因はいろいろ考えられます。が、いちいちあげていると自己嫌悪におちいるのでやめます。

しかし、何よりもまず、これをやろうという具体的な目標に欠けていたのではないでしょうか。SF研の基本方針といったものは会則の前文にも、又「SF」NO.1にも書いてありますが、それは抽象的なものです。

読書会、科学会、SF講座 etc.……SF研として企画するとすればまあこんなところだろう。そして参加する方もそれ以上の域を決して越えてはいませんでした。読書会なり科学会にしてもやり方によってはそれなりに充分意義の深い企画ではあると思いますが……。

SF研の目標がハッキリ定まらなかった大きな原因は、明大SF研自体の性格のあいまいさでした。果たしてその名の通り研究会であるのか、それともSFファンが集った単なる同好会なのか。このあいまいさが、過去に行なってきた企画のあいまいさとなったのです。

最初に書いた通り、先の会合では研究会的な性格を持たせるということに意見が一致しました。私自身も同意見なのですが、その理由として、SF研に研究会的な性格を持たせ、共同研究を行なうということは、SF研の目標が具体的に定まり、それが一つの柱になると考えるから（同人誌「テラ」をもう一本の柱として）です。

読書会とやらでさえうまくいかないのに、共同研究なんて……という意見もあるようですが、私自身の考えでは、できるかできないかではなくて、目標があるかないかだと思います。これはある意味では大変無責任な考えかもしれませんが。そして結局はその人自身のやる気が問題になってくるのではないでしょうか。共同研究ばかりは個人ではできませんし。最後に一言、どんな企画であれ、あなたのそれに対する態度、それ以上ではありません。

（北島 利幸）

反省的読書会考

読書会企画部

＝序にかえて＝

会員の皆さん、"読書会"って、そんなにつまらないものでしょうか？こんなもの、なくたっていいんでしょうか？――合宿を含めて、これまでの読書会をふりかえってみる時、私は思わず問わずにはいられません。――課題本の選定が悪かったからなのでしょうか。会の進行がヘタクソだったからなのでしょうか。企画に無理があったからなのでしょうか。あるいは もっと根本的に"読書会"という企画自体が無理なのでしょうか。

＝課題本について＝

課題本を決めて、それを読ませるというやり方からして問題があるのは事実です。私自身、読書を強制されることはいかなる形においても好みません。まして、その本が自分の嫌いな作家だったりすると、会への参加はもちろん、その本を手にするのさえイヤになる気持はよくわかるのです。――又、課題本を選定するところにも問題は生じます。課題の本はやはり内容豊かな本である方が良い以上、豊かな内容をもつ本を認知、選定できる能力が要求されるでしょう。

＝進行方法について＝

進行――やり方にも再考の必要があるようです。現在とられている方法は、"分割討論の後全体討論"というものです。これは、始めからいきなりみんなで話し合いましょうといっても、意見を出しにくいであろうから少人数に分かれて話しやすい雰囲気の中で、各々の意見、見解を煮つめた上で皆で話し合おうという意図のもとに行われたものです。が、これまでの会を見ると、分割討論で意見を出しつくしてしまい、さて全体討論となってみると、又同じことをいうのは白々しいし、自分の考えはもうきまっているのだから言ったって聞いたってしかたがない、という雰囲気で やっぱり全体討論はもりあがらないのです。――他の企画の会にも言えることだと思いますが、皆で話しあおうということになると、一部の人達しかしゃべらず、会のムードが白けてしまうのはなぜでしょう。"TERRA・3"のときのように、半強制的に発言させると 皆各々意見をのべるのに、さて誰か、何か？となると静かになるのはどうしてでしょう。――何も言いたくない人と、言いたいことがあっても言えない人といるのでし

よう。私は、どちらの気持もわかるつもりですし、又それはそれで構わないとは思うんですが――。

――企画について――

読書会の新しい試みとして『スペース・オペラ』という課題で合宿中にやってみたのですが、みじめな結果におわってしまいました。スペースオペラは、今日のSFの幕あけとして、SF研が一度はとりくんでみなければならない分野であると思っていましたが、どの本も一つの会を持つだけの内容はもっていないと判断し、あのような形で会を開いたわけです。しかし、企画意図が抽象的で具体性に欠けたためか、会を持った時の雰囲気のせいか、暑い中を植物園でしましたね）進行方法がまずかったせいか、企画に無理があったのか失敗におわりました。――このような目的をもった読書を強制することにも問題はあるのでしょうが、読書会の一つの試みとして、研究会としてやってみたのです。――もっとも、当研究会は単なる同好の士の集りであって、サロン的なもの以上のものではないのなら、企画部としては、このようなことはすぐやめたいと考えます。

――といったことを考えた上で（これからの）読書会について――

同じ本を読んだ者同志が、その本について語りあう、という光景は、当会のような性格の集まりの中では、必ずといってよいほど見られるものではないでしょうか。そして二・三人で話し合ってもものたらなくなり、他にその本を読んだ人がいればその人の意見もききたくなるのではないでしょうか。その気になれば、集会などの折に、それも可能でしょうが、やはり、一人一人がそういうことをしていたのでは非能率的だし、なんのために会があるのかわからなくなってしまうでしょう。――このような背景のもとに、読書会が要望され、設置されるのでなければ、読書会なんて、なんともしまりのないくだらないつまらないものじゃないかと思うのです。読書会は、義務の上にではなく、権利の上に成り立っているものではないでしょうか。――ということで、研究会の全体企画とするのは、ごく自然なことだと思う一方、又無理があることとも思うのです。それは、本好きが必ずしも話し好きではなく、又、皆が読んだ本となると数も限られる、人数が多くなれば、秀れた企画、司会者が必要になる等の問題が生じるからです。――そして、ここで、発言の問題、課題本い問題、企画、進行の問題などが出てくるわけです。

ここで、読書会に参加する時の姿勢を五つに分けてみました。

① 本をよく読んできており、一家言もっていて、何か言ってやろうと思っている。

② 本はよんだのだが、よくわからず、あるいはまだ意見、見解が定まらず、他の人はどうなんだろうと、主に聞くためにくる。

③ 本をよんでみたけど、全くどうということもなく、それでも、出席してみりゃなにかあるんじゃないか、と思いつつくる。

④ 読むだけ読んだが全く何ということもなく、全員参加ということだから、というわけでヒマつぶしにくる。

⑤ 読まず、その気にもならず、とにかく出てこいというから顔を出しにくる。

と、まあこんなところでしょうか。これは課題になった本によってだいたいがきまるようです。極端なことをいえば、作家の好みによって分かれるようです。"読書会は全体企画であるから全員出席せねばならない"という名目のもとに、④⑤の人も出席せねばならないということは、会にとっても、本人にとってもマイナスであると思います。やる気のない人達にとって、何時間か黙ってすわっていなければならないことは拷問に近く、又やる気のある人達は、そういう人達がいては、どうもやりにくいのではないでしょうか。——読書会を開催する以上、やる気のある人達の立場を尊重したいので、これからの読書会は自由参加ということにしたいと考えます。研究会という看板に反したような具合ですが——まあ、研究というサロンの中の研究会的集まりだと思って下さい。

課題本など決めずに、会員の要請に応じて自由にやりたいのですが各会員の読書量、好みの差などがありまして、それもむずかしいと思いますので、こちらで課題本を選定してやってゆきたいと思います。——内容を読みとる能力が問題なのですけれど、企画部としてはもちろん真剣にとりくんでいるのですが何分にも力量不足ですので、会員諸賢の協力を乞う次第です。

やり方としては、いきなり全体討論からはじめたいと思います。指名して発言を求めたりするようなことは一切しないつもりです。言いたいことがあったら自由に発言してください。——くりかえしておきますが、これは自由参加です。欠席による不利は一切ありません。

なお、参加者が三人に満たない場合、発言する人がきわめて少い場合は中止とします。

どうもこれでは各種同好会と同じ種類のもののようですが

研究欲旺盛な会員のために、研究会らしいこともやります。スペースオペラで試みたような、ある分野に関する読書会もやってみるつもりです。

――最後に公開質問状的三言三言――

会員諸賢に再び問いたい。当会は単なる同好の士の集まりであって、いわゆるサロン的なものでしかないのでしょうか？"読書会"とは、本当に皆さんが欲している企画なのでしょうか？

新刊紹介

『ホンキイ・トンク』

筒井康隆

昨年の春から今年の冬までの間に各種雑誌に発表された短編の中から九作が収められている。氏特有のスラブスティクな雰囲気が全作に感じられ、ファンには楽しい短編集である。『君発ちて後』『小説「私」』等には、心理学部出身という経歴が感じられる。『雨乞い小町』は退行現象がみられる。このような状況設定ではSFファンはついてこないだろう。全般、くらべて、やはり表題作の『ホンキイトンク』が一番おもしろい。――それにしても、なぜ氏の小説に出てくる女性には美人がいないのだろう。

次回読書会予告

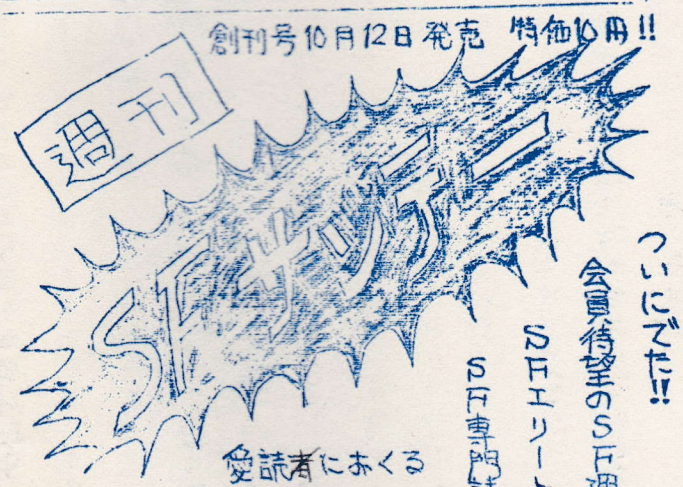
『分解された男』

アルフレッド＝ベスター

創元SF文庫 一九〇円

日時　一〇月二六日（日）（予定）

場所　きっさてん"丘"（国電御茶水駅下車歩一分）



ついにでた!!
会員待望のSF週刊誌!?
SFエリートのための
SF専門誌!?

愛読者におくる

第1弾！連作長編

第2弾！珠玉のショートショート

第3弾！コラム満載

〈土星シリーズ〉①

土星のプリンセス

司修一

2

「いったい今頃、どうしたんですか？」

救助隊の隊長（チーフ）らしい男がうさんくさそうな顔で彼を見、又前方に視線をもどした。外には特別なにも見えず、広漠たる大地が連なり、――しかしそれは妙に輪郭がぼやけていた――寒々とした印象を与えていた。それは　彼に、二〇年前の記憶に敏感に働きかけた。――ここで、大佐殿が革命軍の奴らに殺されたっけ。

「方向をまちがえてしまったのです。」

「そういえばレーダーが壊れていましたね。電圧のかけすぎらしいが、どうしたんですか？」

〝どうした〟〝どうした〟とうるさい奴だ。俺だってどうしたんだかわからないでいるんだ。

「さあ？――突然のことで――。」

「でも、運が良かったですな。ニュー・ワシントンの近くで。あんな救助弾では　もう五キロ離れたらわかりませんよ。――まさか！　いやまてよ。――たしかここは土星だったな。フム、そうか、土星の大気は確かメタンとアンモニアを大量に含んだ水素とヘリウムの混合物――。彼は突然、そこまで思いだした。彼の目は生身ではない。地表近くの厚いメタンとヘリウムの層も、彼の視界を妨げることはできない。

「どこから来たんですか？　新聞社の方のようですが、この本社では、――失礼ながらみかけませんが。」

「ニュー・ロスアンジェルス――。」

彼はとっさにそういった。ニュー・ワシントン以外に　彼は地名を思い出していなかったのだが、なんとなく、そんな都市もあるんじゃないかと思ったのだ。

「ニュー（ニュー）・ロスアンジェルス！――」

皆の眼がいっせいに彼を見た。――まずいことを言ってしまったのか!?

「長くいたんですか？」

一人が妙に神妙な声でたずねた。――彼はなにかとんでもない地名を言ってしまったらしい。〝長くいたか〟って！長くいたようならどうだというんだろう。――短期間だとしたら――。

様子からして、N・L（ニューロスアンジェルス）ってところはよいところじゃなさそう

だ――となると、長くいてもいいことはなさそうだ。

「ええ、――まあ、それほど長くはないですね。」

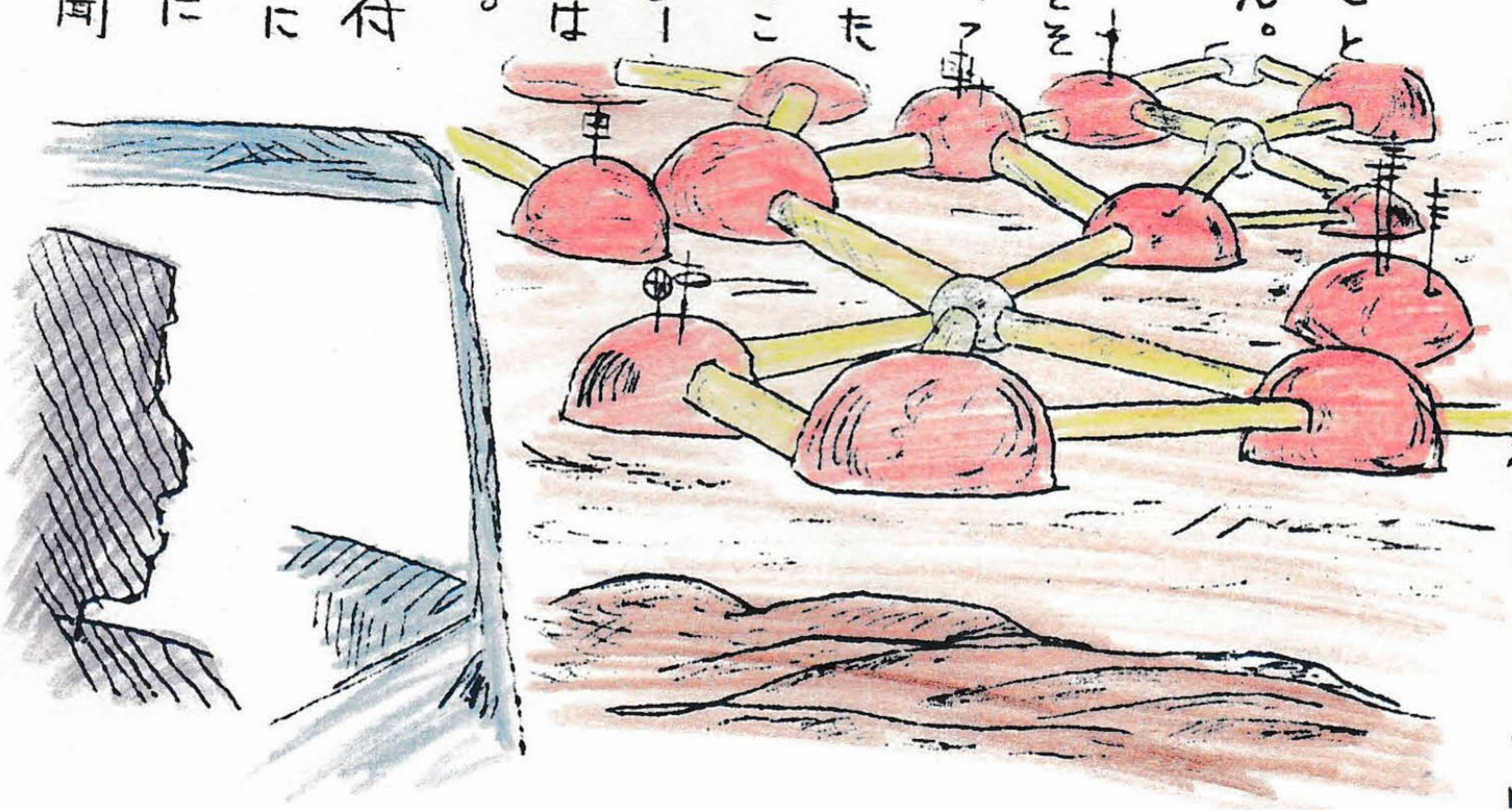
それで会話はおわった。彼らは次々と仕事をはじめ――運転しているやつはレーダーをにらみ、こわれた艇を知らべているやつは又、中にもぐりこみ、彼は無視された。

十五分ぐらいで救助隊の艇はN・Wの市内にはいった。都市といっても、低い楕円形のドームが立ちならび、それらをつなぐ卵形のトンネルが走っているだけの殺風景なものだ。これは、土星の大気圧が地球の約三〇倍もあることからきている。重力は地球と大差なく、一・二四倍といったところだ。おおざっぱにいえば、地球の海底三〇〇mのところみたいなものだ。もっとも まわりは海水ではなく、アンモニアを主とする混合気体、おまけに、平均温度マイナス一五〇度という人間にはきびしすぎる条件である。これだけの圧力と低温に耐えて、自由に動きまわれるほどの宇宙服はまだできていない。艇さえも開発途上なのだ。未だ一般には普及していず、政府関係、新聞社、公的交通機関に使われているぐらいだ。それが この土星の開発を妨げている。そして、似たような状況の木星の開発も――。

気がつくと、彼の乗った艇は、どうしたことか、直接地球新聞社の建て物にはいっていた。――警察でのとりしらべはないんだろうか。――救助隊の隊長が、彼をおろしてくださいやいた。

「もちろん 今日のことでお手数はかけません。失礼しました。」

彼は軽く会釈するとそそくさと艇にのり、出ていってしまった。――どうしたんだろう。N・Lにいたことが原因らしい。――ケースの中にはロスの情報もはいっているかもしれない。時刻だ。――その時 受付の係らしい女性が小走りにこちらにきた。彼は彼女に口を開くスキを与えず、聞いた。



「正確な時刻をおしえてほしいんですが。」
「え？――は、はい。」
腕時計を見て、
「七時二五分です。」
「いや、電子時計かなにかの正確な時刻です。」
「ハ、ハア、――少々おまち下さい。
これでケースがあく。そうすればなんとかなるだろう。――
――彼は女子社員のあとについて車輦を出、事務室にはいり
カウンターにケースをおいた。
「七時二十三分四十秒です。」
彼女が時計をみてからここへくるまでに七秒はどかかっている。
「それは時計が示していた時刻ですか？」
「ええ　そうです。」
すると　今はもう二十四分になっているはずだ。――〇七二四。ケースをあける。
「あ、あの、――。」
救助隊につれてこられた男を前に　彼女は何を言っていいのかわからないようだった。彼の乗っていた艇(フネ)は――こわれてしまっているが、たしかに地球新聞社(テラタイムズ)のものだ。彼はこの社の人間なのだ。
ケースには、ロス支局からのメッセージと、転属命令書がはいっていた。たぶん急物だろう。それとも、実物で、本人といれかわったのかもしれない。――彼はだまってそれをさしだした。
「あ、ロスのN・Lからの――。」
彼女はこわばった表情になり、少し上ずった声でいった。
「社長室へおいで下さい。」

――以下次号

おわび
この作品は　当初連作の予定でありましたが　イントロがまずく　次回をひきうけて下さる方がいらっしゃいませんでしたので　責任をとって　小生が続けて書かせていただくことになりました。
慎しんで　おわびするとともに　御報告致します。
司修一

SF
1969-10 No.6
昭和44年10月12日
発行
編集者
北島利幸
発行所
明大SF研

今月も正二日というスピード発行。
まもなく次号発行。

MSFC

MEIJI UNIV. SCIENCE FICTION CLUB